

第5回都市再構築戦略検討委員会における主な意見

<大都市の国際競争力について>

○世界の都市の間では、目指すべき方向性をベンチマーキングし、ネットワークを通じてノウハウを共有し、切磋琢磨し高め合う、都市間競争が繰り広げられている。

○人を集め、企業を集め、資本を集めることのできる都市になるためには、インフラや環境等の都市競争力を構成する各種要素をバランスを持って備えていることが重要。

○例えばアジアで最も都市競争力のあるシンガポールはビジネスのしやすさが強みになっている。企業を集めなくては国が成り立たないという危機感があり、政府のビジネス支援が手厚い。

○シティセールスは、相手先に対して自らアプローチをするプッシュ・セールスと、その都市に来てもらい、その魅力に気づいてもらうプル・セールスの組み合わせが重要。東日本大震災を始めとする自然災害、また経済発展・都市化に伴う様々な課題を克服した豊富な経験と高度な技術を、同じ悩みを抱えている都市に売り込むなど、弱みを強みに変えるシティセールスの発想も重要。

○MICEによる都市の訪問は通常ビジネス目的であり、呼ばれた側はとにもかくにも来てくれる。そのときにすばらしい都市であると認識してもらえれば、将来的な観光や企業立地の増加につながり得る。ビジネスに影響のある人達を1人でも多く呼んで、都市の魅力に気づいてもらう仕組み作りがMICE戦略では重要。

○欧米等の企業はアジアへの進出を考える際に、地域経済の動向、雇用、生活環境、オフィスマーケットなどについて都市比較を行っている。

○シンガポールは東南アジアのハブとして、香港は中国のゲートウェイとして企業に選ばれており、都市や国の枠を超えた経済圏としての見方が出てきている。グローバル企業は経済圏の経済規模や成長力を重視して立地選好しており、必要と思えば複数の都市に展開する。

○香港やシンガポールと東京を比較した場合、税金や雇用の話に加えて、居住・教育の英語の親和性が課題であるという声がある。オフィスビルの機能の面では遜色はない。

○日本の大都市はアジアのヘッドクォーターを目指す方向性に加えて、蓄積された知財・人材で戦う方向性があると思う。そのためには海外からの誘致に加えて、国内からの流出を防ぐ観点も重要。

○高度知的人材の受け入れにあたっては、生活環境も含めた研究環境を整えることが重要。

○名古屋では、自動車や航空機といったものづくり・製造業の強みを維持しており、海外企業の誘致にも産官学一体となって取り組んでいる。外国語が通用する医療や教育の充実にも取り組んでいる。中央リニア新幹線のインパクトをまちづくりに取り込もうという動きもある。

○国際都市の魅力の1つはそこに行かないと得られない情報があるという情報力。例えばパリやロンドンには国際機関などグローバル・ガバナンスに関する情報の集積がある。シンガポールも、国際会議等でキーパーソンを集め、「そこに行かねばならない」環境を作り出している。

○シンガポール・香港は、大中華圏 (Greater China) 、英語圏・英国法体系 (Union Jack) のネットワークの中にあり、有機的な連携の中で人や情報が動き、文化等の魅力も相まって地域を活力あるものになっている。

○日本でも東京と各都市を結ぶネットワークで強みを増すことができる。中央リニア新幹

線により大都市同士が結ばれば、数千万の人口を有する圏域が1時間内でつながり、魅力的な経済ゾーンを形成できる。

○ヘッドクォーター機能を持つマルチナショナルカンパニーを呼び込むためには、金融面でベンチマークとなる都市に負けない環境が必要。

○国際会議の際のVIPの移動などを見ると、プライベートジェットやヘリの利用に見られるように、海外の都市と比べ空港などから都市内への移動に関わるインフラの部分で改善の余地があるのではないか。

○都市の国際競争力について、立地や経済発展性に加えて、働き手の暮らしやすさ、企業活動のしやすさの面で都市環境を向上させていくことが重要であり、ハード・ソフトそれぞれの魅力を上手くまとめて発信していかなければならない。

○言語環境の国際化を進める1つの方策として、外国の人材は高度知的人材に限定せず、クリエイティブクラスの生活を支える人材やその他サービス業に携わる人材等も受け入れることが考えられる。その際には、郊外の既存住宅ストックを活用したり、都心においては容積率のボーナスを使ったりして、アフォードダブルな（手頃な）住環境を提供するなど工夫が必要。

○大都市の目指す方向性として「アジア地域の拠点」ということが当然のように語られるが、本当に「アジアの拠点にならねばならない」という意識が国民全体にあるかという点と希薄ではないか。日本の大都市は、アジア地域の拠点を目指すのか、あるいは、日本の拠点でも良いのか、このままでは日本の拠点の地位すら海外都市に奪われるのではないかなど、そもそも論を今一度整理することが必要ではないか。

<地方都市の再構築に向けた今後の方向性について>

○社会との接点が希薄なアトム化した高齢者が大量発生するという異次元の高齢化社会が迫っていることを視界に入れて都市のことを考えていくべき。

○これまでの中心市街地活性化の計画論と今回の議論の違いを明確にする必要がある。